# ゼミ論文

# 『日本の子どもがみたアメリカ：米軍基地周辺の子の作文から』

日本大学国際関係学部国際交流学科３年

松本有希

章立て

はじめに
アメリカを見る目
　　恐怖・不安・売春
　　あこがれ・依存心・期待
おわりに

日本とアメリカは太平洋戦争中は敵同士として戦ったが、戦後日本はアメリカに占領され両国は友好的になった、とされる。占領中に使われたという有名な英語表現には、「Give me chocolate」「Give me chewing gum」などのほほえましいものがあるが、実際のところの日本とアメリカの交流はどんなものだったのか？　1950 年代に米軍基地の周りに住んでいた日本人の子どもたちの作文集には子供たちの本音が表れている。そこから当時の日米関係の本質がわかるのでないか。

子供達の作文集には、失礼な態度をとった日本人の子を許さない米兵、日本の女に暴力を振るう米兵、それをなすすべもなく見守る日本人の大人、などの光景が描かれている。自分の村の美しい山や畑が米軍基地建設によって破壊されることを嘆く子もいるし、米軍が日本にいる限り日本は本当には平和的を発展しない、という子供達もいる。　米兵相手の売春婦パンパンの存在を嫌がり、恥じる子もいた。

しかし同時に子ども達は、親が米軍基地で働いていることを自覚しており、米軍がいてこその自分達の生活だ、ともわかっている。米軍が何をしても、アメリカあっての日本なのだ、という気持ちを持っている。米軍の過失で父親を失った少女は、アメリカが日本を占領しているのだから、こういうことが起こっても仕方ないことだ、と

作文に書いた。「過ぎたことはあきらめています」という彼女の感想には、アメリカあっての日本、日本はアメリカに生かされているようなものだから、アメリカに対する怒りや悲しみはもってはならない、という悲壮な決意が読み取れる。　パンパンに対する子供達の気持ちも複雑だ。嫌だ、恥ずかしい、と拒絶する子もいれば、きれいだから好き、という子どももいる。売春宿を経営することで利益を得る日本人も存在するし、風俗営業が盛んになることが街の繁栄だと割り切る大人もいたことを、子どもはわかっていた。　米軍基地周辺に住む子どもたちは、大人と同じように、米軍が日本に駐屯することの被害と利益の両極に気付き、傷ついていた。

もちろん米軍基地周辺に住む子どもたちが受ける被害は心理面以外にも存在する。飛行機や射撃演習の騒音影響などがそのひとつだ。これに関して大阪市立大学教授は次のように述べている。「騒音によって脈拍数、血圧、脳内圧が上昇し、このことによって（児童の）情緒が乱される。ジェット機の騒音は、ものすごく大きなものであり、この爆音を一日に何十回も耳にするのだから、この爆音は私たち日本人の健康で文化的な生活に悪い影響を及ぼし、またその爆音によって学校の授業が中断されるなどの被害もでてくるであろう。騒音が私たちの生活に中で障害となる限りできるだけ早く取り除くように努力することが正しい策である。基地であるからといってこの騒音の問題を放っておいてはならない」。

今回のリサーチでは、「子どもたちは嘘をつかない」という「真理」を強みにして当時の日米関係の真実に迫ったつもりだ。　一方で大人たちはどういった感情をもっていたのだろうか。　子どもたちに悪い影響を与えていたのは、米軍だけでなく、米軍の存在から利益を得ていた日本人の大人たちでもある。　米軍に暴行をしないで欲しい、出て行って欲しい、と言えない大人たちでもある。21 世紀の現在も、日本の様々なところに米軍基地が存在している。特に多い場所が沖縄であるが、その他東京都、山形県、静岡県、千葉県、茨城県、群馬県など日本のあらゆるところに米軍基地は存在している。米軍基地が日本にもたらす「利益」と「不利益」について、日本人ひとりが真剣に向き合っていくべきであると感じる。